



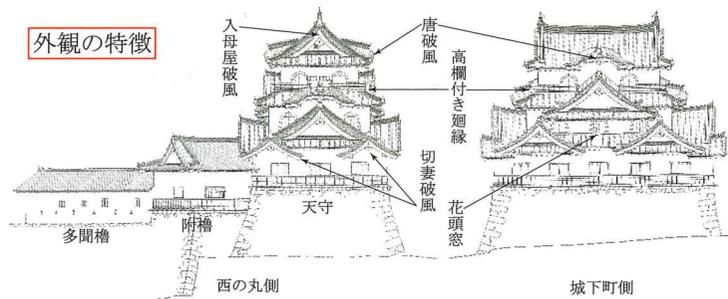
本丸御殿跡側

【国宝】彦根城天守 附櫓及び多聞櫓

関ヶ原合戦の前哨戦で耐え抜いた大津城から移築されたといわれ、慶長12年(1607)頃に完成。政治的象徴としての外観の美しさだけでなく、城本来の機能である軍事面でも優れている。昭和27年(1952)に国宝に指定。

彦根城以外の国宝天守は、姫路・松本・犬山・松江だけ。

外観の特徴



丸みをおびた唐破風や切妻破風を駆使した変化のある屋根。他の現存天守にはない美しさがある。花頭窓は本来、寺院建築に使われ、曲線が美しい窓。高欄付き廻縁は、二重三重の破風にさえぎられ、周囲を回ることはいできない。

内部の特徴

多様な破風を設けた結果、4~5人が入れる広さで隠し部屋と呼ばれる部屋が2階の東西、3階の南北の計4ヶ所ある。ただし、隠し部屋の意図があったかどうかは不明である。隠し部屋の中も含めて、天守内には82箇所もの鉄砲、矢狭間を備える。平時は外から見えないように漆喰壁で塗りこめられており、戦時は壁を突き破って使用する。天守北側の附櫓と多聞櫓の壁は櫓内部の守備隊を鉄砲玉から守るために二重壁とし、間には栗石を詰めて防弾の効果を高める工夫がある。



天守内部 鉄砲狭間

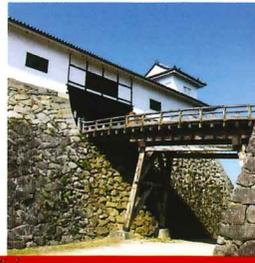
天守内部 隠し部屋 出入り口

多聞櫓内部 二重壁



【国重要文化財】彦根城大鼓門及び続櫓

大手門と表門からの両坂道を登りつめたところにある。廊下橋(戦時には落とすと伝わる)に接続する櫓門部分を中央に、両坂道に面している多聞櫓の角を二重櫓とすることで、左右対称となっており、天秤櫓の名の由来となっている。他の城からの移築と考えられる。建物土台の石垣は右側が築城当時の打込みハギ積み、左側が江戸後期の改修による落とし積みとなっている。



【国重要文化財】彦根城天秤櫓



西の丸の西に建つ櫓で、さらに西に張り出した出曲輪との間に深い堀切を設ける。西方の搦め手(裏手)からの敵に備えた守りの要であった。三重櫓は、この搦め手を見下ろす位置に設けられた。

【国重要文化財】彦根城西の丸三重櫓及び続櫓

佐和口に向かって左に伸びる多聞櫓。明和4年(1767)に火災で類焼し、現在の建物は明和6年から8年にかけて再建されたもの。明治になって、櫓門は失われたが、本来はその右に伸びる多聞櫓(現開国記念館)と一体のもの。



【国重要文化財】彦根城三の丸佐和口多聞櫓

こけら葺きの屋根が美しい馬屋である。藩主などの馬21頭がつながれていた。城内に残る馬屋は全国でも彦根城にしかない珍しい建物である。平成27年度に二度目の本格的な文化財保存修理を終え、往時の姿を取り戻した。



【国重要文化財】彦根城馬屋



【国名勝】玄宮楽々園(玄宮園・槻御殿、復元整備中)

玄宮園は下屋敷である槻御殿(現楽々園)に伴う後園として江戸時代前期に作庭された大規模な池泉回遊式庭園。中央に掘られた池泉には大小4つの中島が築かれ、様々な形式の橋が架けられて自由な回遊性を確保するとともに庭園内の景観にもなっていた。回遊する園路は、当時園内に存在した4つの茶屋へ誘うように巡っており、玄宮園が茶会を中心とした大名の社交の場となっていたことを裏付けている。

玄宮園では池泉護岸の保存整備を実施しており、失われていた水田等の復元整備も実施している。



復元整備した水田



鳳翔台：園内を一望しながら抹茶(和菓子付き500円)を一服できる。

現在、楽々園と呼んでいる範囲は延宝5年(1677)に4代直興によって造営されたと伝わる下屋敷の範囲であり、江戸時代は「槻御殿」などの名前と呼ばれていた。この槻御殿は下屋敷であると同時に「隠居所」としても使用され、13代直弼は隠居していた11代直中の子としてこの槻御殿で産声をあげている。御書院棟前面の庭園は、鈴鹿の山並が園外の眺望となっている座観式の庭園。

槻御殿については平成17年度より歴史的建造物の保存修理事業を実施している。



保存整備した御書院棟